野球

宇部銀次君（18歳・盛岡中央高３年）
捕手178cm／76kg　右投げ／左打ち

写真提供/畠山保男さん（緑区）

2005 夏
特別インタビュー

夢に向かって

ファイト！GINJI

夢はかなえるためにある。その夢を追いかけている人は、いつの時代も輝いている。普代中野球部出身で、現在、盛岡中央高等学校で野球部に所属する宇部銀次（うべぎんじ）君。野球専門誌などでプロ野球ドラフト候補として全国区で注目されている。夢に向かって、今年、高校最後の夏を迎える銀次君に広報が電話でインタビューした。

支えてくれる たくさんの人がいる だから、頑張れる

「チームメートや友達、いろんな人が支え応援してくれています。だから、頑張れます」と銀次君。人に対する感謝と謙虚な気持ちは忘れない。それゆえ、同僚や後輩からも慕われ、チームの中心的存在になっている。

普代中時代、県大会こそは経験していないが、ＡＡ全国K―Ball野球大会では久慈地区選抜に選ばれ県で優勝、全国大会出場の経験を持つ。野球を始めた小学２年から、キャッチャー一筋で、普代中時代も３年間マスクをかぶりチームを引っ張った。

「中学のとき、盛岡中央の試合を見て、一つ上の先輩キャッチャーにあこがれ、進学を決めました」と銀次君。あえて県下トップクラスのキャッチャーと同じ場で学び、競う道を選んだ。一塁までの塁間を４・１秒で走る脚力と左オープンスタンスから繰り出す鋭い打球が銀次君の魅力。そのバッティングを生かすため、１年時は４番、レフトのポジションについた。

２年生になるとサード兼キャッチャーで活躍。夏の大会では先発マスクもかぶった。結果は県大会準々決勝で、専大北上に２対３で敗退した。

その雪辱を胸に臨んだ昨秋の東北大会では８強に進出。銀次君のスピード感あふれるプレーはひときわ目を引いた。打率６割６分６厘と大活躍。まさに打線の軸だった。

しかし、春の県大会はキャッチャーとしてのリード面で、勝負どころで中途半端になったところを打たれ惨敗した。これを機に「ピッチャーとのコミュニケーションを大切に、頭を使った野球を心掛けました」と銀次君は話す。

顧問の佐々木大介監督は「キャッチャーは、バッターの欠点を突くだけでなく、味方ピッチャーの長所や短所を見極め、ランナーの位置、風向き、球場の条件などを生かすリードが必要」という。「今の銀次はそれができている。最近の試合で銀次がマスクをかぶったときは、４点はとられたことがない」と絶対の信頼をおいている。

「練習はきついです。でも、みんなが僕を支えてくれているから頑張れます」と銀次君。目標は「甲子園出場」ではなく、「甲子園で勝つこと」、そして「好きな野球を続けていくこと」だ。夢に向かい輝き続ける18歳。正真正銘、最後の夏を迎える。